日本人大学生の英語学習意識及び方略についての研究

江口　　誠[*1]

An Analysis of Japanese University Students' Perceptions and Strategies of English Learning

Makoto EGUCHI

要　旨

佐賀大学では、2013年度から全学統一英語能力テストとして、１学年の前学期及び２学年の後学期の２回、TOEIC　IP の受験を義務づけている。しかしながら、これまでに TOEIC 受験時に学生が回答する属性アンケートが英語教育の観点から検討されることもなく、さらにはアンケート結果とスコアとの関係についての検証もなされていなかった。そこで本研究では、2019年度前期に英語教育の観点から一新した属性アンケート結果とスコアを用いて、学習者の英語学習習慣、動機づけ、学習態度、学習方法及び英語学習に対する自信について分析を行った。その結果、学習者の英語学習の傾向と教育改善のための幾つかの有益な示唆を得ることができた。

【キーワード】TOEIC、学習時間、カイ二乗検定、アンケート

１．はじめに

佐賀大学の教養教育課程である全学教育機構では、2019年度入学生については必修科目として各１単位の授業を合計４単位履修することになっている。但し、履修時期の違いにより、教育学部、芸術地域デザイン学部、経済学部、理工学部及び農学部の学生は２年間で、医学部の学生は１年間で４単位を履修する[*2]。2013年入学生以降、佐賀大学では全学統一英語能力テストとして、全ての学生に合計２回の TOEIC IP の受験を義務づけている。これによって、継続的な英語学習を促し、英語運用能力の向上を目指している。医学部以外の学生は１学年の前期と２学年の後期に、医学部の学生は１学年の前期と後期に TOEIC IP を受験し、そこで得られたスコアは、当該学期に履修している英語の科目の成績の一部として加味されることになっている。成績評価方法の詳細については割愛するが、250点以上のスコアを取得すれば、段階的に最高30点までが付与される。因みに、医学部以外の学生は英語Ｄのみ、医学部の学生は英語Ｂ及び英語Ｄがその評価の対象である（表１）。

*1：佐賀大学　全学教育機構

*2：学部構成については、正確には2015年度入学生までは、文化教育学部、経済学部、医学部、理工学部及び農学部の５学部であったが、改組により、2016年度入学生以降は、本文に記載の６学部体制となった。

TOEIC IP 受検時には、受験を行う団体の裁量によって受験者全員に６項目以内の任意の属性アンケートを実施する事が可能となっている。但し、回答方法は０から９までの10択以内で、さらに複数選択が不可となっているなど、その活用方法に自由度があるとは言い難い。さらに残念なことには、本学では全学統一英語能力テスト導入以来、例えば総合的な自己学習時間、学生生活や卒業後の進路についてなど、英語とはおよそ関係のない項目が多く属性アンケートに入れられてきたという事実がある。つまり、まさに英語試験時に実施すべき英語に関する適切な質問がこれまでほとんどなされておらず、属性アンケートが有効に活用されてこなかったのである。さらに大きな問題は、それでも幾つか含まれていた英語に関する質問項目と TOEIC スコアとの相関を分析することさえ行われてこなかったという事実である。

表１　佐賀大学における教養教育課程の英語カリキュラム

	１学年		２学年	
	前期	後期	前期	後期
教・芸・経・理・農	英語Ａ TOEIC	英語Ｂ	英語Ｃ	英語Ｄ* TOEIC
医学部	英語Ａ・英語Ｂ* TOEIC	英語Ｃ・英語Ｄ* TOEIC		

＊当該学期に受験した TOEIC スコアが成績に加味される科目

そこで2019年度前期に実施した TOEIC IP テスト実施時には、全項目において英語教育に関係のある、以下の６項目を新たに属性アンケートとして設定した（詳細については、資料１を参照のこと）。

⑴　授業時間以外に英語に費やした週当たりの学習時間
⑵　授業に関する勉強以外に英語学習に費やした週当たりの学習時間
⑶　英語圏の文化への興味（動機づけ）
⑷　英語学習の楽しさ（学習態度）
⑸　英語試験の技術（学習方法）
⑹　英語学習の自信

よって、本研究の主な目的は、上記の６項目のアンケート結果と TOEIC スコアとの関係から、学習者の傾向をつかむという点にある。さらには、そこで得られた結果から、今後の佐賀大学の英語教育の充実及び学生の英語力の向上に対する何らかの示唆が得ることである。

２．調査方法

分析の対象は、2019年前期に本学で TOEIC　IP を受験した１年生1,331人である。統計分

析の資料となるのは、TOEIC IP テスト及び属性アンケートとなる。以上の方法で収集したデータはエクセル統計を用いて分析を行った。アンケートデータ６項目については集計し、それらを数値化して分析を行った。

実際に分析を行う前に、本学における2015年度から2019年度までの全学統一英語能力テスト（TOEIC IP）の結果を確認したい。因みに、佐賀大学ではその結果をホームページで公開している[*3]。2013年度以降、ほぼ毎年１年生の平均スコアは伸びており、2018年度には455.9点まで上昇し、その上昇幅は66.6点となった。しかしながら、2019年度入学生については411.7点となり、急激に全体の平均点が落ちている。１学年前期の１回目の受験から約１年半後の２学年後期に受験する２回目の TOEIC IP とのスコアの差については、若干ではあるが上昇していることが分かる。しかしながら、2017年度入学生については、全学生への受験を課してから初めてスコアが下がっている。2018年度入学生の第２回目の平均スコアの結果の公表を待つまではいかなる予断も許されないが、もしそのような傾向が今後も続くようであれば、本学の英語教育のあり方を根本的に見直す必要があるのではないかと思われる。

表２　入学年度別の TOEIC IP スコア

	１学年前期		２学年後期		
入学年度	受験者数	平均点	受験者数	平均点	平均点の差
2013（H25）	1,342	389.3	1,268	403.3	14.0
2014（H26）	1,343	388.0	1,282	410.4	22.4
2015（H27）	1,338	408.5	1,264	422.7	14.2
2016（H28）	1,315	416.2	1,263	439.9	23.7
2017（H29）	1,328	439.8	1,280	436.18	−3.6
2018（H30）	1,346	455.9		未公表	
2019（H31）	1,331	411.7		未実施	

注：２学年後期の受験者には医学部の１年生が含まれる

2013年度以降、ほぼ毎年１年生の平均スコアは伸びており、2018年度には455.9点まで上昇し、その上昇幅は66.6点となった。しかしながら、2019年度入学生については411.7点となり、急激に全体の平均点が落ちている。１学年前期の１回目の受験から約１年半後の２学年後期に受験する２回目の TOEIC IP とのスコアの差については、若干ではあるが上昇していることが分かる。しかしながら、2017年度入学生については、全学生への受験を課してから初めてスコアが下がっている。2018年度入学生の第２回目の平均スコアの結果の公表を待つまではいかなる予断も許されないが、もしそのような傾向が今後も続くようであれば、本学の英語教育のあり方を根本から見直す必要があるのではないかと思われる。

これらのスコアを日本の大学生全体のスコアと比較してみたい。TOEIC の実施団体である国際ビジネスコミュニケーション協会（IIBC）が毎年発表している『TOEIC プログラム

[*3]：http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/toeic.html

DATA & ANALYSIS』の最新版（2019年度版）によれば、2018年にTOEIC IPテストを受験した大学１年生の平均スコアは439点、大学２年生の平均スコアは450点であった。従って、本学の学生のスコアは、全国平均もしくは若干それを下回る程度と考えられる。また、2019年度入学生に限定し、リスニングとリーディングそれぞれの得点について細かく見てみると、全国平均ではそれぞれ247点と193点であるが、本学の１年生については、それぞれ230.7点と181.0点となっている。従って、全国平均と比較しても、リスニングもしくはリーディングのいずれかのスコアがとりわけ低いということではなさそうである。

次に、TOEIC IPテストの合計、リスニング及びリーディングのスコア分布について確認したい。但し、諸事情により度数分布やヒストグラムを掲載することは控える。従って、以下の記述については、あくまで参考程度に提示するものである。それぞれ2019年の６月（ないし７月）に本学でTOEIC IPを受験した2019年度入学生のうち、今回の分析となる1,331名のスコアについて確認した。合計スコアについておよそ正規分布として見なしてよいのではないかと判断するが、リスニングスコア及びリーディングスコアについては疑問が残る。いずれも二峰性になっており、リスニングは右側（スコアが高い方）に、リーディングは左側（スコアが低い方向）に最も大きな山があり、後者については左側に偏ったヒストグラムであるため、リスニングと比較すると、相対的に母集団のリーディング力が低い方向に寄っていることが窺える。

そこで、実測度数分布と期待度数分布についての適合度のカイ二乗検定を行ったところ、３つの全ての実測度数分布について$p<.001$という結果が得られたため、正規分布ではないと言える。さらに詳細に見てみると、それぞれの歪度及び尖度については、リスニングは0.5036と4.0842、リーディングは0.7603と3.9519、そして合計スコアは0.7431と4.4127である。全ての山が左側つまり低いスコアの方に偏っており、中でもリーディングの偏りが顕著である。さらに全てについて尖度が３を超えているため、正規分布よりもより尖ったグラフとなっている。従って、本学では、特にリーディング力の向上に焦点を当てた英語力向上策について検討すべきであることが明白である。

４．調査結果

４．１　習熟度別のTOEICスコアと英語の学習時間

学習者全体としての数値では英語力の実態の把握が困難であるため、習熟度別に分け、さらに英語の学習時間との関係について分析した。田口（2013、2016）に倣い、TOEIC IPスコアが395点以下の学生を「下位グループ」、400点から545点の学生を「中位グループ」、そして550点以上の学生を「上位グループ」に分け、その結果を表３にまとめた。また、図１から図６はその結果をグラフ化したものである。

アンケート項目１は、「Ｉ．今学期を振り返り、授業時間を除いて教養英語の授業の予習・復習・課題に１週間当たり平均何時間費やしましたか。あてはまるものを１つだけ選択して

表３　習熟度別の英語の学習時間

	アンケート項目１			アンケート項目２		
	下位	中位	上位	下位	中位	上位
項目平均値	2.7	3.0	3.1	1.9	2.4	2.6
１．全くしていない	18.3	11.1	7.6	42.8	32.3	27.2
２．30分未満	30.2	28.4	29.1	30.9	28.6	29.7
３．30分以上１時間未満	27.6	31.3	27.2	18.0	20.7	19.0
４．１時間以上１時間半未満	14.4	15.1	20.9	4.7	6.6	10.8
５．１時間半以上２時間未満	5.6	6.8	10.8	1.6	7.3	6.3
６．２時間以上	3.9	7.2	4.4	2.0	4.5	7.0

下さい。」という質問項目であり、６件法「１．全くしていない；２．30分未満；３．30分以上１時間未満；４．１時間以上１時間半未満；５．１時間半以上２時間未満；　６．２時間以上」によって授業に関連した英語の１週間あたりの学習時間を調べた結果である。学習時間０分から30分以下の学習時間しか取っていない学生は、下位グループは48.5％、中位グループは39.5％、上位グループは36.7％である。「30分未満」と回答した割合についてはどのグループも大差はないが、「全くしていない」と回答した割合には差がある。つまり、下位グループは英語力が相対的に低いにもかかわらず、その約２割が予習や復習もせずに英語の授業をただ受けるだけの状態に陥っていることが分かる。また、下位グループについては、30分未満の割合が約半数であることも留意すべきである。この数字が示しているのは、習熟度が低いクラスの多くでは、課題や小テストが設定されていない、もしくは設定されているにもかかわらず英語学習に取り組んでいないということになる。もし前者の場合は大きな問題であるため、早急に大学全体で統一した指針を決定し、習慣的に全く英語の勉強をしない学生を減らす努力をすべきだと考える。

アンケート項目２は、「Ⅱ．今学期を振り返り、授業に関する勉強を除いて英語学習に１週間当たり平均何時間費やしましたか。あてはまるものを１つだけ選択して下さい。」という質問項目であり、授業とは関係のなく英語学習に費やした１週間あたりの学習時間を調べた結果である。学習時間０分から30分以下の学生は、下位グループは73.7％、中位グループは61.4％、上位グループは56.9％である。習熟度が下がるにつれて英語学習をしない学生の割合が高くなっているのが特徴的である。この数字に関係しているのが、学生が英語を勉強する動機づけであり、これについては、後述する。

アンケート項目１及びアンケート項目２の回答内容をさらに詳細に見てみると、その両方とも「1.全くしていない」と回答した割合、つまり英語の授業のための勉強も、授業以外の英語に関する勉強も一切していない学生の割合は、下位グループは14.3％（80人）、中位グループは7.6％（36人）、上位グループは5.7％（９人）であった。全く英語の勉強に取り組まない学生は、英語力が相対的に最も低い下位グループで最も多いことが分かる。割合だけを見ると中位及び上位グループとの差はそれぞれ6.7％と8.6％であるが、学生数の差はかな

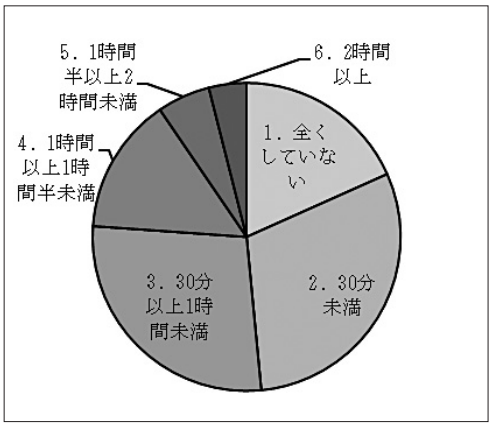

図１　アンケート項目１（下位）

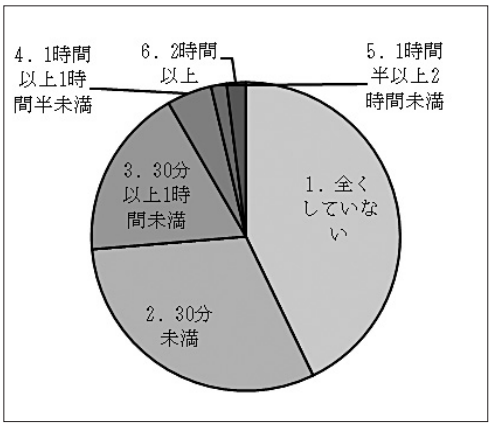

図２　アンケート項目２（下位）

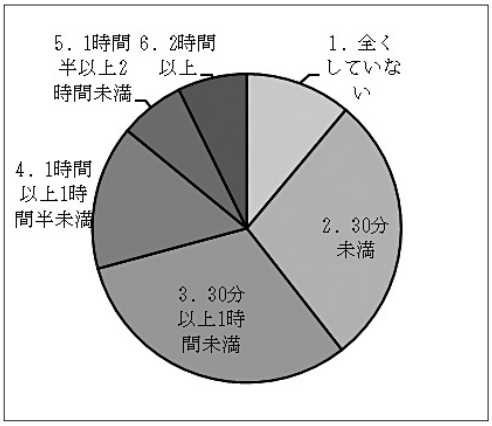

図３　アンケート項目１（中位）

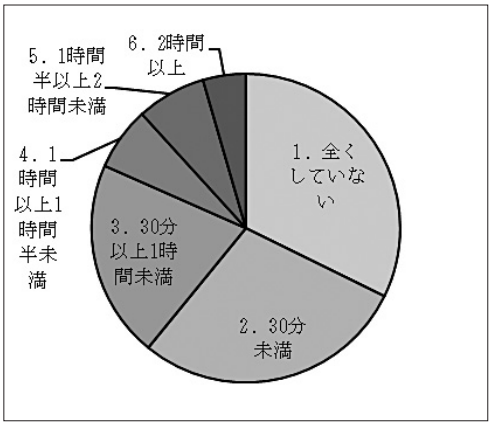

図４　アンケート項目２（中位）

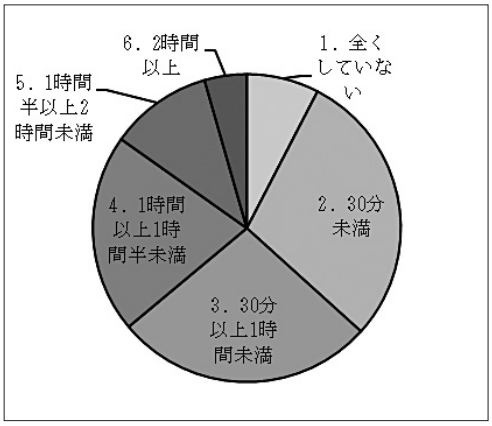

図５　アンケート項目１（上位）

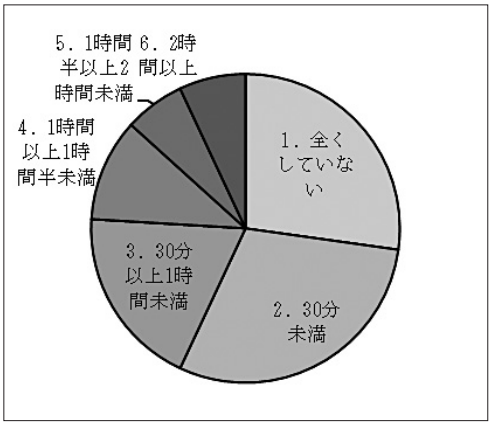

図６　アンケート項目２（上位）

り大きいことが分かる。そもそも今回の分析においては、最も学生数が多いのは下位グループであるため、このような結果になっている。従って、本学における喫緊の課題はこのような学生に対する動機づけをいかに行うか、という点になるかと思われる。

4．2　習熟度別の TOEIC スコアと動機づけ

英語学習の動機づけについては多種様々な要因が考えられるが、TOEIC が提供する属性アンケートでは項目数及び回答方法に大きな制限があるため、今回は「統合的動機付け」と「道具的動機付け」の概念に基づき、前者に関係する１つの項目として調査した。質問項目３では、「Ⅲ．英語圏の文化に興味がある。」という問いに対して、４件法（１．全くそう思わない；２．そう思わない；３．そう思う；４．強くそう思う）によって回答を得た。後述の質問項目４から６についても同様である。その結果を表４にまとめている。

アンケート結果を好意群と非好意群の２種類に分けて考えると、好意群については、下位グループは56.9％、中位グループは72.8％、上位グループは86.7％であった。つまり、英語圏の文化に興味がある学生は、例えば英語で理解することが必要な音楽や映画などを理解するための勉強に努力しようという動機づけがあり、さらにその結果がスコアに表れていることが分かる。そしてその興味の度合いは習熟度と比例していることも、アンケート結果から明らかである。

さらにこの結果を前項4.1の英語の学習時間との関連で考察したい。ここで注目したいのは、アンケート項目３で英語圏文化に興味があると回答しながらも、アンケート項目１及び２において学習時間が０から30分未満の学生である。下位グループは5.6％（31人）、中位グループは4.2％（20人）、上位グループは3.2％（５人）であった。動機づけがあっても、日々継続的に英語の学習をしなければ英語力は向上しないため、やはり習熟度が低い学習者については、意識と行動が伴っていないことが明白となった。この結果は、ｅラーニング学習について分析した拙論の江口（2015）から得られた示唆「学習者アンケートから、下位群の学習者ほど理想の自己と現実の行動との間に大きな隔たりがある可能性が示された」とも関連があると考える。従って、理想の自己は高いけれども習熟度が低い学習者たちをいかに英語学習に誘導するのかという点が肝要であろう。

表４　「英語圏文化に興味がある」

	アンケート項目３					
	下位		中位		上位	
項目平均値	2.5		2.8		3.1	
１．全くそう思わない	15.5	43.1	7.0	27.2	3.8	13.3
２．そう思わない	27.6		20.2		9.5	
３．そう思う	48.7	56.9	60.3	72.8	60.1	86.7
４．強くそう思う	8.1		12.5		26.6	

4．3　習熟度別の TOEIC スコアと学習態度

属性アンケートの４つめの項目として、「Ⅳ．英語の勉強は知的好奇心を満たせるので楽しい。」を設定した。これは、学習者の学習態度について調査するための質問であり、その結果を表５にまとめた。

表５　「英語の勉強は知的好奇心を満たせるので楽しい」

	アンケート項目４					
	下位		中位		上位	
項目平均値	2.1		2.6		2.8	
１．全くそう思わない	20.5	68.2	8.5	42.3	3.8	29.6
２．そう思わない	47.7		33.8		25.8	
３．そう思う	29.3	31.8	48.9	57.7	53.5	70.4
４．強くそう思う	2.5		8.7		17.0	

アンケート結果を好意群及び非好意群の２つに分類してまとめると、好意群については、下位グループは31.8％、中位グループは57.7％、上位グループは70.7％であった。いわゆる内発的動機づけに属する要因が学習者にあるかどうかという点がポイントであるが、やはり習熟度が下がるにつれてその割合は相対的に低くなっている。とりわけ、下位グループと上位グループの差は31.6％にも開いている。

さらにこの結果を4.1で分析した英語の学習時間との関連において考察したい。アンケート項目１及び２で学習時間が０から30分未満の学生のうち、さらにアンケート項目４で「1.全くそう思わない」もしくは「2.そう思わない」と回答した学生は、下位グループで11.8％（66人）、中位グループで5.3％（25人）、上位グループで3.2％（５人）となった。つまり、英語学習に対して知的好奇心を持っている学習者とその実際の学習時間は比例しているという事であり、これについてはある意味当然の結果であると思われる。上記4.2の結果と同じく、英語学習そのものへの動機づけが希薄な学生たちに、どのようにして英語学習の楽しさや魅力を感じてもらうか、という観点を重要視すべきであることが明らかとなった。

4．4．習熟度別の TOEIC スコアと学習方法

属性アンケートの５つめの項目として、「Ⅴ．英語の試験で有効なテクニックを知っている。」という問いを設定した。学習者が習熟度別にどのように英語の学習方法について考えているかという点を調べる目的である。その結果については、以下の表６にまとめている。

アンケート結果を好意群及び非好意群の２つに分類してまとめると、好意群については、下位グループは8.6％、中位グループは15.1％、上位グループは25.9％であった。習熟度に比例してその割合が高くなっており、さらに習熟度別に大きな差が広がっているということもなく、これについては想定内の結果となった。

表６　「英語の試験で有効なテクニックを知っている」

	アンケート項目５					
	下位		中位		上位	
項目平均値	1.6		1.9		2.1	
１．全くそう思わない	45.9	91.4	23.0	84.9	17.1	74.1
２．そう思わない	45.4		61.9		57.0	
３．そう思う	7.7	8.6	13.8	15.1	22.8	25.9
４．強くそう思う	0.9		1.3		3.2	

４．５　習熟度別の TOEIC スコアと英語学習の自信

属性アンケートの６つめ項目として、「Ⅵ．勉強すれば英語を習得する自信がある。」という問いを設定した。「英語を学習すれば、その分英語力が向上するはずだ」、というビリーフを学習者がどれだけ強く持っているかという点を調査する目的である。その結果については、以下の表７にまとめている。

表７　「勉強すれば英語を習得する自信がある」

	アンケート項目６					
	下位		中位		上位	
項目平均値	2.4		2.8		2.9	
１．全くそう思わない	15.1	47.1	3.4	30.4	3.8	18.5
２．そう思わない	32.0		27.0		14.6	
３．そう思う	46.2	52.9	59.8	69.6	66.9	81.5
４．強くそう思う	6.7		9.8		14.6	

アンケート結果を好意群及び非好意群の２つに分類すると、好意群については、下位グループは52.9％、中位グループは69.6％、上位グループは81.5％となった。これについても、上記4.4と同じく、習熟度に比例して好意群の割合も高くなるであろうという想定通りの結果が得られた。ここで重要なのは、TOEIC スコアが395点以下、つまり日本の大学１年生の平均スコア以下の下位グループの学生の約半数が、英語を勉強しても習得する自信がないと感じているという結果である。

この結果を４．１で得られた英語の学習時間のアンケート結果と関連付けて考察したい。アンケート項目１及び２で、週当たりの英語の学習時間が０分から30分未満の学生のうち、さらにアンケート項目６で「１．全くそう思わない」もしくは「２．そう思わない」と回答した学生は、下位グループで9.5％（53人）、中位グループで3.8％（18人）、上位グループで1.3％（２人）という結果であった。ある意味当然の結果ではあるが、習熟度が高くなるについて非好意群の割合が低くなっている。しかしながら、習熟度の差ほどの大きな違いが認められるとは言い難い。つまりは、習熟度が低く、英語学習についての自信がない学習者であっても、本学の１年生に限って言えば、ある程度は英語の勉強に取り組んでいるというこ

とである。

本学における喫緊の課題としては、習熟度が低く、かつ英語学習に自信を持てない学生に対する対応策をいかに講じるかという点だと考える。それは基本的には英語教員が日々の授業の中で個々に実践すべきものである。しかしながら、教養教育課程における英語教育を司る全学教育機構としては、その点を重視したカリキュラムの再構築を行うことが先決であろう。さらには、習熟度の低い学習者でも自信が持てるような授業設計を行うように、専任及び非常勤講師が定期的に一堂に集まって全担当教員の意思統一を図り、さらにFD等を開催するなどして、定期的に個々の教員のスキルアップを図る事が不可欠だと考える。

5．まとめ

以上、TOEICスコアと6つのアンケート項目の分析を行った。主に以下の5つの示唆が得られた：

1．TOEICスコアの度数分布から、特にリーディングの低スコア方向への偏りが顕著であるため、リーディング力向上に特化した英語教育を施す必要がある。
2．下位グループ（TOEICスコア395以下）の学生は、英語力が相対的に低いにもかかわらず、その約2割が予習や復習もせずに、英語の授業をただ受けるだけの状態に陥っている。
3．英語圏の文化に興味のある学生の割合は、英語の習熟度と比例している。
4．英語学習に対して知的好奇心を持っている学習者の割合は、英語の習熟度及び英語の学習時間と比例している。
5．下位グループの学生の約半数は、英語学習によって英語力が向上するはずだというビリーフを持っていない。

今回の分析は、単にTOEICスコアと6つの属性アンケートをまとめ、その結果について考察したものに過ぎない。属性アンケートの制限はあるものの、学生の英語力を向上させるためには、分析の継続とその結果のフィードバック、つまり授業改善及びカリキュラムの再構築が不可欠である。今回得られた幾つかの示唆から、本学として講じるべき施策を早急に検討する必要があるだろう。

資料１

TOEIC IP 属性アンケート

解答用紙7の属性欄については、以下のⅠからⅥの質問に答えて下さい。0（ゼロ）はマークしないで下さい。解答は TOEIC スコアや成績には全く関係ありませんので、素直に答えて下さい。

Ⅰ. 今学期を振り返り、授業時間を除いて教養英語の授業の予習・復習・課題に1週間当たり平均何時間費やしましたか。あてはまるものを1つだけ選択して下さい。

1. 全くしていない
2. 30分未満
3. 30分以上1時間未満
4. 1時間以上1時間半未満
5. 1時間半以上2時間未満
6. 2時間以上

Ⅱ. 今学期を振り返り、授業に関する勉強を除いて英語学習に1週間当たり平均何時間費やしましたか。あてはまるものを1つだけ選択して下さい。

1. 全くしていない
2. 30分未満
3. 30分以上1時間未満
4. 1時間以上1時間半未満
5. 1時間半以上2時間未満
6. 2時間以上

Ⅲ. 英語圏の文化に興味がある。

1. 全くそう思わない
2. そう思わない
3. そう思う
4. 強くそう思う

Ⅳ. 英語の勉強は知的好奇心を満たせるので楽しい。

1. 全くそう思わない
2. そう思わない
3. そう思う
4. 強くそう思う

Ⅴ. 英語の試験で有効なテクニックを知っている。

1. 全くそう思わない
2. そう思わない
3. そう思う
4. 強くそう思う

Ⅵ. 勉強すれば英語を習得する自信がある。

1. 全くそう思わない
2. そう思わない
3. そう思う
4. 強くそう思う

参考文献

江口誠.（2013).「第４章 e-learning 教材を用いた英語教育の実践」.『英語力向上に向けた愛知教育大学の挑戦―質保証と学習自律向上を目指して―』. 愛知：中部日本教育文化会.

－－－.（2015).「Web 学習システムを活用した英語教育の実践と課題」.『佐賀大学全学教育機構紀要』、３、69-86.

－－－.（2016).「Web 学習システムを活用した英語教育の実践と課題（２)」.『佐賀大学全学教育機構紀要』、４、57-70.

国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会.（2019).『TOEIC®プログラム DATA & ANALYSIS 2019』. 参照先：https://www.iibc-global.org/library/default/toeic/official_data/pdf/DAA.pdf

白井恭弘.（2008).『外国語学習の科学―第二言語習得論とは何か』. 東京：岩波書店.

田口達也.（2013).「TOEIC350点閾値導入効果について」.『英語力向上に向けた愛知教育大学の挑戦：質保証と学習自律向上を目指して』. 愛知：中部日本教育文化会.

－－－.（2016).「カリキュラム変更による英語力、学習時間、学習自立性への影響―小学校英語教育とグローバル人材育成に向けて―」.『グローバル人材育成を目指した愛知教育大学の取り組み：英語力と学習意欲を高める学習環境の充実に向けて』. 名古屋：鳴海出版.

－－－.（2018).「TOEIC、学習時間、そしてやりぬく力―愛知教育大学の事例から―」.『教養と教育』、18、１-９.